短期連載

続々 交通事故ホームズの事件簿2

ジャーナリスト 柳原三佳 やなぎはらみか

したが、私たちはそのとき事故の内容をまったく知らなかったので対応のしようがありませんでした。

一夜明けた午前十一時、ようやく面会が許されました。でも、拓也の瞳孔は半分開き、機械のおかげで呼吸を続けているだけ。まったくの植物人間のように見えました。それから二時間後、拓也は息を引き取りました。まだ、十五歳でした……」

母親は、唇を震わせながらその日のことを振り返った。

検視は、そのままK大学病院で行われることになっていた。ところが、突然、警察署員がやって来たかと思うと、「検視はこちらで行います」と言って遺体を警察署に運び、近所の診療所から医師を呼んだ。

両親はそのとき、小さな疑問を抱きながらも、警察の指示に従うしかなかったという。

◇

「葬儀が済むと、悲しさと悔しさの入り交じった気持ちがあらためて募るばかりでした。一刻も早く事故の真相を知りたいと思っていたのですが、警察からは五日たっても何の連絡もありませんでした」

ひょっとして、警察というところはこちらから出向かないとだめなのかもしれない……。

そう思い直した両親は、事故から六日後、警察署をたずねた。

しかし、警察の対応はあいまいだった。返ってくる答えは「もうそろそろ連絡しようと思っていた」とか「まだはっきりしたことは言えない」といったものばかりで、なぜか事故の真相には触れようとしない……。

結局、何もわからないまま警察署を後にした二人は、とりあえず事故の第一報を自宅に入れてくれた男性に話を聞いてみることにした。

「そうですか、亡くなったんですか」

彼は、残念そうにそう言った。

「僕が現場を通りかかったのは事故の直後でした。見ると、交差点の真ん中に人が倒れていて、その人の頭が黒い乗用車の下敷きになっていたのです」

「黒い車の下敷きに?」

「そうです。それで、周囲にいた人たちと協力してその車を持ち上げ、なんとか体を引き出したのです。黒い車を運転していた若い女性は、あわてて自宅まで父親を呼びに戻ったようです。そうだ、そのお嬢さんに直接たずねてみたらどうですか?」

事故の一部始終を見ていた目撃者の証言

黒い車の存在を初めて知った両親は再びその足で警察署へ行き、その女性の名前をなんとか聞き出した。

吉田恵子(仮)、彼女の父親は地区の自治会長であり、警察の防犯支部長もつとめていた。事故の当日、加害者の上司が「地元の名士のお嬢さん」としきりに言っていたのは、彼女のことに違いなかった。

◇

翌日、約束の場所に現れた吉田恵子は、事故の様子を次のように語った。

「私は右折しようと思い、交差点の真ん中で対向車(軽トラック)の過ぎるのを待っていました。軽トラックは、時速三五キロくらい出ていたと思います。そこへ、赤信号を無視した自転車が走ってきて軽トラックに衝突し、乗っていた人は投げ出されて私の車の下に入り込んできたのです」

「止まっていたあなたの車に、うちの息子がもぐりこんだのですね……」

「はい」

「そうでしたか……」

言ってみれば、彼女もまた被害者である。

両親は、息子の無謀な運転のために大変な迷惑をかけてしまったことを丁重に詫び、彼女と別れた。

◇

「私たちは、息子のあまりの無謀さにがっかりしながら現場に立ち寄りました。ところがそこで偶然、あの事故の一部始終を目撃していたという近所の男性に会うことができたのです」

松崎氏というその男性は、六日前にこの事故を目撃してからというもの、被害者の少年のことが気がかりで、かたときも心の休まることがなかったと話した。彼は、少年が亡くなったことを知ってさらに表情を曇らせながら、事故の瞬間を振り返ってくれた。

「事故の直前、白い軽トラックは赤信号で止まっていました。私も軽トラックと同じ方向から歩いてきて、同じように青になるのを待っていたのです。

信号が変わり、私が歩き始めたときでした。突然、ガンと音がして、まず自転車が飛び、次に少年の体が空中に舞い上がって地面にたたきつけられました。そこへ、少し間を置いてから黒い車が走ってきて、少年の顔の上をひいたのです。

最初にぶつかった軽トラックの運転手さんはすぐに車から降りて、どこかへ走っていきました。そして現場へ戻ってくると、黒い車のドアをたたいていました。中からは若い女の人が出てきましたが、彼女は動転した様子で、そのまま逆の方向へ急いで走っていきました。自転車の少年が、止まっていた黒い車にもぐり込んだですって？とんでもありませんよ」

「証言」は突き返され検証は打ち切られた

両親は混乱した。数十分前に聞いた女性の証言と、現場を歩いていて事故を目撃したという男性の証言がまったく食い違うからだ。

息子は車の下にもぐり込んだのか、それとも地面にたたきつけられてからひかれたのか？

息子から見た信号は赤だったのか、それとも、赤に変わった直後だったのか……。

両親は松崎氏の証言を文書にしてもらい、それを警察に届けた。

「ところが、担当の巡査部長は『あ、これはいらないから持って帰って』とあっさり言うのです。一瞬、信じられず驚いていると、巡査部長は面倒くさそうに『コピーだけ取っておいて』と部下に指示して、元の文書を私たちに突き返しました。警察を唯一の頼りにしていた私たちは、言いようのないショックを受けました」

それから約二週間後、両親の嘆願で松崎氏の証言に基づく再検証が行われることになった。しかし、肝心の黒い車の話に及ぶ寸前で、なぜか検証は打ち切られた。

結局、松崎氏の証言は採用されなかったのである。

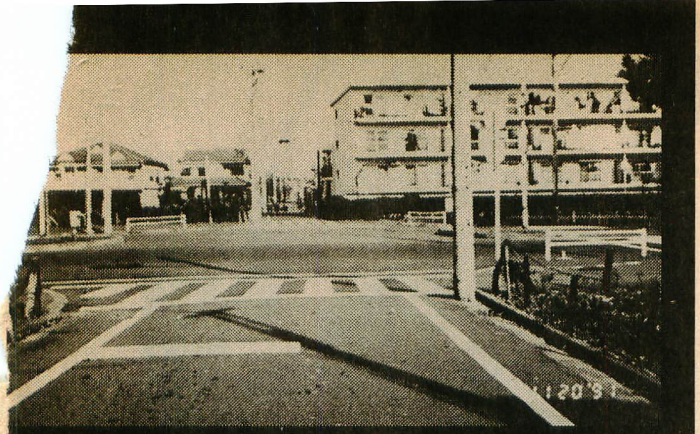
事故から半年後、検察庁は、

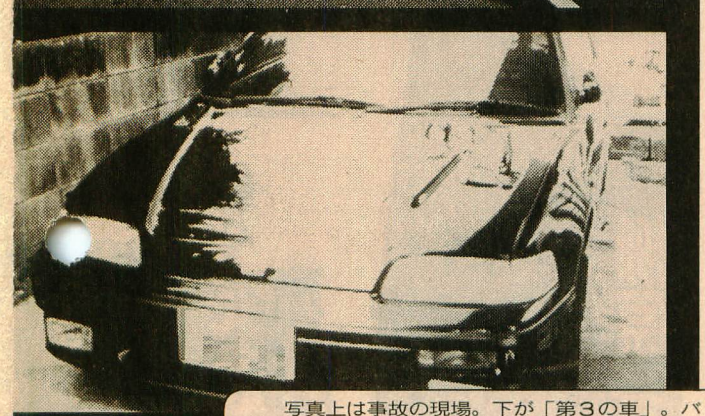
「この事故は自転車を運転していた森田拓也の信号無視による不可避なものだった」

として、軽トラックの運転手を不起訴処分に。また、黒い乗用車を運転していた女性については、この事故とはまったく関係がなかった、という判断を下した。

◇

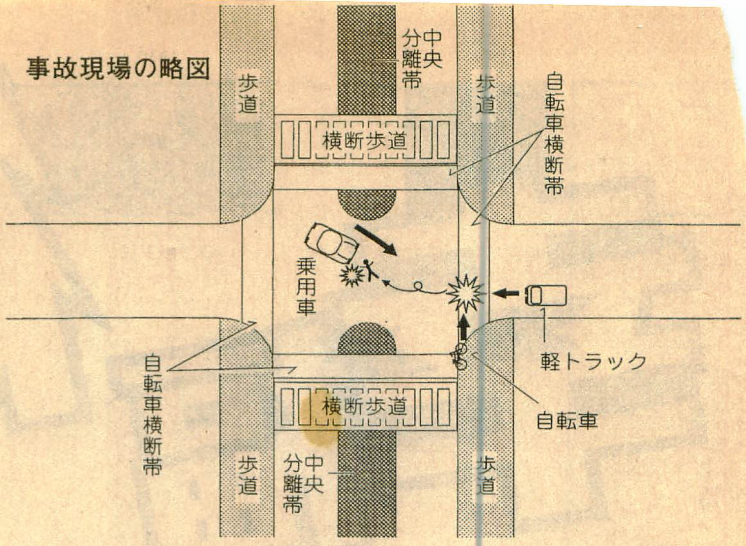
「この事故の捜査は、あまりにも物証を軽視していた。人の死を伴う重大事故だというのに、死因に直接関係する部分について、一行の記録も、一枚の有効な写真もないなどということがありうるだろうか。単なるミスや経験不足として許容するには限度を超えている。遺族が警察に不信感を抱くのも無理はないよ」





写真上は事故の現場。下が「第3の車」。バンパー下部にエアスポイラーがついたスポーツタイプで、静止した状態では、人間の体が入るほどのすき間はない。問題の部分は証拠保全されることもなしに修理されていた

事故現場の略図



駒沢氏は強い口調でそう言いながら警察が保全しなかった重要な証拠の数々を列挙した。

①吉田恵子の黒い車――押収も写真撮影もしていない。被害者の体によって損傷したと思われるバンパーの一部（エアスポイラー）は事件の翌日に交換修理されていた。

②被害者の自転車――当初、警察は被害者の自転車を保管せず、加害者に預けていた。

③被害者の衣服――両親が返還を求めているが、警察が紛失してしまい、まだ返還されていない。

④被害者の顔面・頭部の外傷――傷の部位、方向等を見れば、衝突態様、衝突相手、死因の特定が可能だが、検視は警察署で簡略に行われ、十分な資料が残されていない。

⑤実況見分調書――本来、関係者ごとに作成すべきものなのに、川島康男と吉田恵子の説明が同一の調書に記入されている。吉田恵子の話は数行のみ。

⑥現場見取り図――記載されている数値や位置関係に疑問点が多い。特に、軽トラックのものとされる七㍍あまりのブレーキ痕には、自転車との衝突による進行方向の変化が見られない。ほかにも理由はあるが、このブレーキ痕が軽トラックのものとは考えにくい。

修理業者の証言から浮かび上がる「事実」

「どうだい、この前、私が『露骨な例』と言った意味がわかっただろう？警察が残した客観的証拠は異常に少なく、当然、鑑定においても正確な答えを出すことが難しかった。ただ、黒い車の動きについては、修理業者の証言などから得た交換部品の傷から、ほぼ断定できた」

駒沢氏は意見書の一部を指さした。

「エアスポイラーの右下面には路面ですれたような擦過痕が見られた。この場所に擦過痕をつくるには、ある程度の接地圧とある長さの摺動が必要だ。言い換えればこの傷は、地面に押しつけられた状態で車が動いていたという証拠になる。つまり、黒い車は動いていた。停止直前のノーズダイブ（制動による車体の前傾）によって、拓也君の頭部を押しつぶしながらひいたんだ。それ以前に、『現場に居合わせた人々が車の前部を持ち上げ、かなり奥へ引き込まれていた拓也君の体を引き出した』という事実があったのにもかかわらず、『拓也君が飛び込んできた』という吉田の主張に何の検証も加えなかった警察の態度は、作為的としか受け取れない。このような行為は、公権力に対する不信のみにとどまらず、時として、遺族の心に必要以上の苦しみを与えることになるんだ」

◇

警察によるずさんな検証、そしてそれをもとにした検察庁の判断にどうしても納得できなかった両親は、九四年十月、検察審査会に捜査のやり直しを求める申し立てをした。

拓也君の母親は語る。

「けっして相手の方が憎いんじゃありません。黒い車との二次衝突は、状況から見て避けられなかった事故だと思いますし、うちの息子も信号が赤に変わっているのに飛び出したようですからしかたありません。でもなぜ警察は、吉田さんの存在をそこまでして隠さなければならなかったのでしょうか。私たちはただ、息子の最期の真実を知りたいだけなのに……」

事故から四年目。両親は今も、息子はなぜ死に至ったのか、という疑問を追い続けている。

（つづく）

（本文中の登場人物は仮名です）

転地 こまった浪人 学習
寄宿生（文・理・医 計10名）募集
※予備校が性に合わず、宅浪も不安という受験生諸君に、当舎への転地学習をお勧めする。 東京に近くて遠い上州は赤城山麓。空気もよく水もよい。
※ご心配の親御さんは、電話で具体的にご相談下さい。葉書の場合は電話番号をご記入下さい。当方から電話します。

昔塾 簡林舎
〒371 前橋市幸塚213-5
☎0272(32)6500